太陽がギラギラ輝く炎天の下を、
歩きながら、僕は、強く決心した。

「今日も行こう、
今日はきっと行こう。
おばとこへは、ちょっとだけ寄って、
すぐ行こう。」
そう思いながら、中書島で電車を降りた。

京都側のフォームに向かったら、
僕はびっくりした。

あれ！
何と！
何と言うことか！

ベンチに上下真っ白にめかし込んで、
彼女がすわっている。

僕は本当にびっくりした。

こちらを見ている。

白いハンケチで口と鼻を隠している。

目が笑っている。

僕の歩調はどんどん減速して、
今にも止まりそうになった。

115 自分の言いたいのは何か・・・・・・・・・・・ 520

萩原良昭